京三中・山城高庭球部の記

山城10回　飯田　茂

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　五中庭球部の土壌
Ⅲ　五中庭球部の創設
Ⅳ　五中庭球部の活動
Ⅴ　京三中庭球部の時代
Ⅵ　山城高庭球部の前哨
Ⅶ　京三中・山城高庭球部の先達者
Ⅷ　京三中・山城高テニス部ＯＢ会
Ⅸ　山城庭球倶楽部について

Ⅰ　はじめに

「庭球部」という表現はいまどき、いかにも時代がかったという印象を免れないが、その昔とった杵柄（きねづか）という世代にとっては、この言葉の響きにはその時々の時代を反映し

た、言い知れぬ「愛着」とある種の「気合」といったものさえ感じさせる。

よく知られるように、この言葉は「ローンテニス・Lawn Tennis」に由来し、近代テニスの幕開けを象徴する一八七〇年代のイギリスで、コートに芝生（lawn）を敷いて行われたことに端を発する。

その意味で庭球という訳語は実情に相応しい、当を得た表現と言うべきかもしれないが、周知のごとく今は「テニス」という言い方が一般的で、しかもこのほうが「通じ」がよいと言ってはばからない。

しかしながら、今般、母校百年を機にこれを回顧し、あるいは展望するというのであれば、ここは「庭球」または「庭球部」という伝統的な言い回しで、適宜すすめていくのもひとつの味わいと言って良いかも知れない。

この「庭球部の記」は、これまでわが母校庭球部であまり知られなかった五中（明治四十一年・一九〇八年～大正七年・一九一八年）及び京三中（大正七年・一九一八年～昭和二十三年・一九四八年）の庭球部と、その背景の記述にやや重点を置いた。

Ⅱ　五中庭球部の土壌

さて京三中は当初、五中として明治四十一年（一九〇八年）四月、一中（現・洛北高校）から分離し、新たに花園の地に開校された。その経緯は周知のように、当時の一中は施設・学生数比による分校設置等キャパシティの問題と、生徒の通学事情などの問題が膨らんで、分校に通学していた生徒と新入生の計三百余名を新たに五中の生徒として移籍させ、発足にいたったものである。

したがって、五中開校時の生徒の構成はすべてが新入生から成るというのではなく、分校に通学した京一中の当時三年生～一年生が同年四月を期にそれぞれ進級し、かつ新一年生九十余名を含めた新体制というものであった。このような事情から、当時の一中分校の一年～三年生徒たちにしてみれば、京五中に移ったのちにあっても課外活動の組織・運営等にあたっては実態として、京一中の制度ないし慣行から容易には抜けきれなかったことは想像に難くない。

庭球部所属の生徒たちにしてみれば、昨日まで一緒に練習し、励まし合っていた仲間が突然二つに別れ、片や吉田に残り、片や花園の地（―当時、下立売通りから七条に至るまで田んぼと林と桑畑で埋まっていた―）に敷き、その感慨は一方ならぬものがあったに違いない。

明治四十一年十二月京一中学友会誌（第十七号）に掲載され

た「府立第五中学校」と題する論稿はその辺りの事情と、送る立場の心情を吐露するものとして、すこぶる興味深い。（文節は少々長くなるが、全文を掲げておく）

『神楽岡ノアタリ霞コメテ、ソボ降ル春雨ニ花ビラ一片二片地ニ落チヌ。思ヘバ悲シ親シミ睦ビシ我友ト茲ニ袂ヲ別ツ悲運ニ会セルヲ。

世運ノ進展ハ侵々トシテ止マズ、教育ノ普及ハ津々浦々ニ至ルマデワタリ、中等教育近時特ニ勃興シ来タリ、我府四個ノ府立中学ヲ以テ尚不足ヲツゲ、サキニハ我校分校ノ増設アリシガ更ニハ今第五中学ノ創立ヲ見ルニ我ガ友多ク之ニ赴ク。顧ミレバ昨日マデ同ジ学ビノ窓ノ下ニ互ニ扶ケ扶ケラレツツ文ニ武ニ切磋セシ我友今日ハ既ニ第五中ノ人トナッテ我校ヲ去ラル情禁ズル能ワズ。

サアレ発育成生ノ一経路トシテ自然界尚細胞分裂ノ現象アリ。今吾人比細胞分裂期ニ臨メルカ、サアラバ国家社会ノ進歩発達ノ一経路ヲ踏メルモノニシテ実ニ慶スベキナリ。私意ヲ挟ンデ別レヲ惜ムハ吾人ノ屑シトセザル所、サラバ五中ノ諸子行ケ、送別ノ式、送別ノ運動会、ミナ此行ヲ盛ニセム。願ワクハ諸子、加茂川ノ東、吉田ノ里ノ我校ヲ忘レザレ、紙屋川ノ西花園ノ里ナル第五中学ハ常ニ吾人ノ念頭ニアラム程ニ。』

そして十年後（大正七年・一九一八年）、京五中は文部省告

示により新たに京三中として改編され、校名も当初にさかのぼって、「京三中」の名を使用することとされた。

Ⅲ　京三中庭球部の創設

京五中庭球部の創設については前述の通り、京一中の分校に通学の庭球部員がそのまま、横滑りの形で京五中に移籍し、あわせて新入生の入部希望者が新たに加わった新体制での発足ということになる。この点につき、京五中の創立の際、庭球部が即部活動に践み切っていたことを証明する文献として、次の二点、即ち（A）「京都府立第一中学校学友会誌」と（B）「京都府立第五中学校一覧」は貴重な資料ということができる。

（A）京都府立第一中学校学友会誌

同校の学友会誌は京五中（京三中）のそれと同様、原則的に年一回の発行であったが、現在、洛北高校図書館には全く保存されていない。そして、五中庭球部の活動を記録したものとしては、つぎの三点が同校の同窓会事務局に保存されているのみである。

a）京一中・学友会誌、十八号、明治四十三年三月刊

「明治四十一年度庭球大会記事」として、明治四十二年度庭球部史からの引用文をここに転載している。

「第五中学校×・・・・・○第一中学校（若松、御影池）五

中以外にも、他九校との戦績を列記しているがこの分は割愛する。また本号の記事に限って、他校の選手名は記載されていない。

b）京一中・学友会誌十九号」、明治四十三年十二月、行啓記念号

「庭球部大会記事」として―「五中／平岡・白井　○……三（一中）津田・松島」c）京一中・学友会誌二〇号」、明治四十五年三月刊

「庭球部大会記事」として一、

「五中／東・神楽　一　……三　本校／道盛・桐山」

この三誌のうち、特にa）の明治四十一年度庭球大会記事は五中創立時、庭球部が既に対校庭球大会に参加していたことを示す貴重な記述ということができる。

（B）「京都府立第五中学校一覧」（明治四十二年度版）

この一覧の中の「本校諸規則」のなかに関連の規定が置かれている。

内容は一）職員に関する規則（全四条）、二）保証人に関する規則（全八条）、三）生徒に関する規則（全九条）、四）寄宿舎規則（全十二条）の四篇で構成される。

庭球部の歴史と活動を知る手がかりは、三）の「生徒に関する規則」に記述されている。その内容のうち、庭球部に関連す

る箇所を抜粋してみると―、

「三、生徒に関する規則

運動遊戯ニ関スル規定ハ左ノ如シ

（一）本校ハ学友会ノ事業トシテ経費ノ許ス範囲内ニ於テ各部ノ運動遊戯ヲナサシム（中略）

（五）運動遊戯ヲナシ得ル時間ハ左ノ如シ

（イ）野球庭球部ニアリテハ毎日放課後二時間（冬）乃至三時間（夏）トスルモ日曜日大晦日及長期休暇中ハ之ヲナスコトヲ得ス

（ロ）漕艇部ハ毎日曜日ニ限リ之ヲナスコトヲ得ルモ長期休暇中ハ之ヲナスコトヲ得ス（中略）

（七）対抗競技ニ関スル規定は左ノ如シ

（イ）先方ヨリ当方ニ来タルモ当方ヨリ先方ニ行クモ一学年ヲ通シ四回ヲ超ユルコトヲ得ス。各部ノ大会ヲ其ノ中ノ一回ニ算ス」

このように、（B）の「5のイ」の記述からも開校当時に五中庭球部の組織とその活動があったことが証明されたということになる。

上にみたように、京一中学友会誌記事（特に「Aのa」）及び五中生徒諸規則（特に「Bの5のイ」）二つの資料から、明治四十一年四月の時点、すなわち五中開校時における庭球部の

存在とその活動の片鱗を伺い知ることができたが、確認資料としてはそれで十分であるかと思われる。

ただここで気になることは、肝心の、母校の「京五中・学友会誌」の側からは庭球部の活動は何も確認することができないという点である。

京五中・学友会誌は現在、明治四十三年十二月発行の第三号のみが京都府立総合資料館に所蔵されていること以外、その所在はまったく知られていない。

この「京五中・学友会誌」は、昭和四十六年発行の「六十周年記念号によれば昭和五年三月まで計二十三冊（年刊）発行されていることになるが、山城高校図書館には一冊も保存されていない（ちなみに、京一中・学友会誌についても現在、洛北高校図書館にもまったく保存されておらず、同校同窓会事務局に合本三冊のみが保管されているという）。

なおついでながら、明治四十三年十二月発行の京一中・学友会誌二十号（行啓記念号）には各校対校庭球大会での各記録が収録(前記)されているにもかかわらず、同じ出版年月の第五中・学友会誌（行啓記念号）には編集方針の違いによるのか、当該記事の類は確認することはできない。

Ⅳ　京五中庭球部とその活動

五中庭球部は、先に述べたように明治四十一年（一九〇八年）四月、京五中が京一中分校から改編され、新しく開校した時期とほとんど時を同じくして活動がはじまった。

明治四十年代から大正の初期にいたる軟式庭球の全盛期の真っ只中、五中庭球部の組織・制度・運営等は京一中の庭球部のそれをほとんど全面的に踏襲した形でスタートした。

まず学校事業機関として学友会が設置され、その事業の一環として漕艇部とともに野球庭球部が設置され、予算措置その他の認可のもとに活動する。ここで「野球庭球部」というのは、学友会事業として予算執行など一括処理の対象として学校側からみた分類であって、個別的の行動に際しては野球部、庭球部という名称で、それぞれ独自の活動をおこなっている。その活動の一端は、前項（3）のA）に見られるように、府内外各中学校間の庭球部定期大会をはじめ、個別的な対抗戦なども含まれていることは言うまでもない。

ただ、前述の五中生徒諸規則によれば開校当初、対外活動は年四回を超えることは許されず、しかも日々の練習さえも二時間（冬）乃至三時間（夏）と限定されるという極めて閉塞的な規制の下に置かれていた（これが生徒の教育目的に著しく反するということで、のち「本校諸規則」自体、削除されていることは前に述べた）。

ところで、このよう厳しい条件のなかで練習を重ねた初期の京五中の庭球部員としてどのような人たちがいたのか。

大正四年度の京都府立第五中学校一覧の中の卒業生名簿と先に見た京一中学友会誌記事の中の庭球部大会戦績表を対比した結果（いずれも四年生時の試合出場）、次の方々の名が確認される（敬称略）。

① 明治四十四年三月、京五中（京三中）第二回卒（総数四十七名）

平岡直弘、白井吉三郎

② 大正二年三月、京五中（京三中）第四回卒業（総数六十名）

神楽一英、東唯一

これは、ごく限られた現存資料の中からの確認であるため、上記以外の例えば第一回卒業生の中にも庭球部員がいたかどうかについては、判然としない。ただ、年月は多少下がって大正初期、当時、五中庭球部にいた桑原五郎（京三中七回、大正五年卒）氏が「母校六十周年記念号」の中の「母校の思い出」と題するエッセーで「私はテニスの選手で五年生のとき、同級の水島文藤君と、龍谷大学の府下全中学テニストーナメントに出て優勝したことがある」と、さり気なく述べている箇所がある（前記「六十周年記念号」四十二頁）。

先に見た「京一中・学友会誌」の中の断片的な庭球対校戦績

表では、京三中庭球部の成果は何一つ見ることは出来なかったのに、この記述からすると創立後五、六年を経過した時点では、五中庭球部の水準は一定のレベルに達していたと言えなくないことになる。その意味で、これは興味深い指摘であると言うことができる。

V　京三中庭球部の時代

大正七年（一九一八年）、京五中は文部省告示により新しく京三中に改編された。そして、明治四十一年（一九〇八年）以来十年の歴史は校名を新たに、つぎの新しい一歩を踏み出すことになった。

この明治末期から大正の初めにかけては、京都府の中学校庭球界にあっては軟式庭球の全盛時代と言うべく、母校のほかに、明治九年以来の伝統を誇る京都師範、一中、二中、一商、同志社、真宗中など各校において覇権を競う日々、激しい練習がおこなわれたであろうと思われる。

その一方で、全国的な視野で当時の学生庭球界に目を向けてみると、次に述べるようにローンテニス本来の硬式ボールの使用を目指した新しい働きが刻々と進み、それに伴い組織、制度並びに運用面においてこれまでと画期的な、硬球の時代を迎えることになる。

すなわち―

大正二年（一九一三年）慶応義塾が我が国初の硬式を採用。

大正九年（一九二〇年）早稲田も続いて硬式ボールを採用。

同　　（同）　第一回全国硬式庭球大会が開催。

大正十一年（一九二二年）日本庭球協会が創立、その主催で、

同　　（同）　第一回全日本庭球選手権大会開催。

そして中学庭球界においても、時代は多少下がるが大正十二～十三年（一九二三～四年）頃から、関心を集めていた準硬球（―ゴム球の硬めのもの）の使用につき、その適否を判断するため一年有余のトライアルを重ねるという経過措置を試みながらも結局、昭和六年（一九三一年）にいたって、硬式ボールが正式に採用されることとなった。

VI　山城高庭球部の時代

さて、旧制中学に硬式ボールが全面的に採用された昭和六年（一九三一年）といえば、母校ではこの年、往年の名プレーヤー中原敬二（三中二十七回、昭和十一年卒）が入学した年である（中原については、次項で詳述する）。この一九三一年は満州事変が勃発し、一九三七年の日中事変、一九四一年の太平洋戦争へと連なるいわゆる十五年戦争の第一段階の時期であった。その入学直後は未だ、満州国樹立による征服感と日常の生

活物資にさほど不足を感じない比較的恵まれた時代であった。

中原はそういう恵まれた環境のなかで、一九三七年の日中戦争に備えての物資抑制がはじまり、母校テニスコートが銃器庫に転用される前年までのちょうど五年間（旧制中学は五年制）を丸々、練習に打ち込むことができたのである。

彼の腕は上級生に至らない段階で早くも頭角を現し、生まれもっての運動神経と人一倍の練習量により、中学庭球界ではトップランクに上り、最上級生となっては京都で、シングルスは固より竹本正一と組むダブルスにおいては右に出る者はいないとまで言われたという。

中原卒業した年の翌年（昭和十二年・一九三七年）から、三中のテニスコートは、戦争のあおりで銃器庫と化し、戦後にいたってなお芋畑として転用されるなど引き続き目的外利用に甘んじた。

爾後、昭和二十六年（一九五一年）の新制山城高テニスコートとして復元されるまでの十四年間という長い間、コート不在の庭球部として悲惨を味わう結果となった。それはほかならぬ、先の十五年戦争そのものの犠牲とも言うべき空白の時代でもあった。

そして途中、時代は変わって昭和二十三年（一九四八年）、京三中は山城高に生まれ変わった。それまでなにかと一元的に

把握されていた感のある庭球部も、新制の部活動として硬式庭球部と軟式庭球部とに別れ、それぞれが新しくスタートした。それは硬式庭球部サイトから言えば、十数年間にわたる円町の第一銀行コートでの居候練習あるいは校内の「控所」、鴨川河原敷の府立医大コートあるいは府立第二高女のコートの借用といった放浪の部活動にも、ようやく終止符をうつことになった。

Ⅶ　京三中・山城高の先達たち

（一）中原敬二（京三中二十七回、昭和十一年卒）

中原は、幼少のころから足が速く、小学校ではいつもリレー選手として活躍した。性格はまことに穏やかそのもので、むしろ地味といった印象をえるほどであったという。しかし三中庭球部同級生によれば、いったんコートに入れば、どんなボールでも拾いまくったという。そして、庭球部の中で早くから頭角を現し、京都師範、一中および一商

中列左から二人目：中原敬二

などとのリーグ戦では三中の中核として活躍し、わけても伝統の一戦といわれた師範との対校戦では確実に結果を出したといわれる。そして昭和十二年、早稲田大学に入学、その年、はや全日本庭球ランキングは十二位を占めた。翌十三年には十一位、十四年には十位と、年を追うごとにその順位を上げ実績をあげた。昭和十五年の最上級生のときには、全日本庭球選手権シングルスで決勝に進み、相手の小寺治雄（神商大、現・神戸大）との一戦では八―六、六―一と優勝にあと一歩と迫りながら、その後二―六、三―六、四―六と崩れて惜しくも優勝を逸した。後日、親しい友人に語り伝えたところによれば、二セットアップと有利に進めた段階で、コートチェンジの際か、コート脇に置かれていた大優勝カップが目に入り、それから急に調子がおかしくなっていったという。

これと似たことが偶然かどうか、その前日の準決勝で、その小寺と戦った同じ早稲田の木村靖（当時、中原、種田と並んで早大三羽烏と言われた）も七―五、六―三と二セットアップしながら、零―六、零―六、四―六と同じようなパターンで敗退している。

いったい小寺のテニスは、福田雅之助（早大の大先達）の記すところによれば、ボールが落ちてくるような位置でラケットをブラブラさせながら相手を焦らして、切れ味のいいドロップ・

ショットと絶妙のドライビング・ロブを決め手とする、したたかな戦法であるという。

中原にしてみれば、いずれにせよ一世一代のチャンスを逃がす結果になった。そして翌十六年三月、大学を卒業した。折しも第二次世界大戦が勃発したこととも相俟って、それから長らくの間、テニスの第一線から遠のくことになる。

そして昭和五十一年にいたって、その間の空白を埋める勢いで毎日テニス、関西テニス両選手権の壮年ダブルスで優勝し、再び中原の名を浮かび上がらせた。しかも、その年から両方とも三年連続優勝という輝かしい戦績まで残した。

中原は、自分のプレー・スタイルを『強打で決めるよりもミスをせず、粘り強く繋ぐタイプ』と評する。そしてプレーに際して相手の特徴や欠点を素早く捉えて球を処理すること、要するに「考えるテニス」を常にモチーフとした。晩年、彼はこう述懐している。「思えばはるか昔、中学（旧制）に入学した頃何気なく始めたテニスだったが、以後私はついに半世紀以上にもわたり、ラケットを握り続けることになってしまった。時代は移り変わっても、私のラケットに対する郷愁は忘れることはできず、いまだに休日にラケットを持ってコートに出掛けていくのが、暮らしの中のひとつのサイクルになっている。しかし、とにもかくにも長年テニスに励まされながら今日までこられた

ことを私は今感謝しなければならないと思う」と。

その翌年、平成三年五月三日、七十三歳で彼はその生涯を閉じた。

（二）西八条実（京三中三十一回・昭和十五年）

今年八十三歳を迎える西八条は、現在も月二回、年齢の加算をほとんど感じさせない姿勢で島津製作所の役員室に通う。さすがに今はテニスの球を追うこともなく、後年親しんだゴルフさえ今は控えて、養生の心がけを一層強くする毎日だという。

しかしその語り口は穏やかながらも、投げる眼差しは老いた鷹の目の如く鋭く人の目をそらせない。

彼のテニス遍歴は、昭和八年、小学校五年生の時から始まる。その家系一族にテニス好きがおおかったこともあって、テニス（軟式）に習熟する度合いは人一倍早かった。そして翌年早くも、対外試合は六年生からしか出られなかったという地域ブロック大会に学校代表で参加し、その地域ブロック大会で優勝するという快挙を成し遂げ、ここに彼の「テニス生活の第一歩」は幸運なスタートで始まった。

そして昭和十年（一九三五年）、テニスへの自信をみなぎらせて京三中に入学する。当時、京三中庭球部には中原敬二が最上級生にあって活躍し、京都中学庭球界でその名を高からしめていた。そしてその存在感と、硬式への習熟に何がしかの圧迫

感を感じつつも、西八条は持ち前の負けん気と努力で、硬式テニスへの新たな境地を踏み鳴らし始めていた。

しかしながら前にも述べたとおり、昭和十二年、日中戦争への予鈴が激しく鳴り響く中、テニスコートは銃器庫転用への強制措置が執られ、爾後、テニス部活動は前にも触れたように企業コートないし大学コートへの放浪の練習時代にはいっていった。

そして、三中での残りの在学期間四年間はそういう環境の中へ埋没することになった。自前コートに比べてはるかに劣る練習環境には、西八条ならずとも部員の大勢がテニスへの失意を感じていたであろうことは容易に想像される。

西八条は、自身がテニスを身体ごと燃え立つように覚えたのは三中においてではなく、むしろ三高に入学してからであったと回顧する。わけても、一高との定期戦にかける彼の思いは、青春のすべてのエネルギーをぶち投げる気迫に満ちていたという。

それは単に、その折々に沸き立つ血潮の決勝といったものだけではなく、おそらく嘗て身を置いた三中テニス時代の不幸なテニス環境に対する言いようのない気持ちをラケットに秘めたに等しい、とさえ言ってよいだろう。

そして、西八条はこの時期に至ってテニスの戦い方に一つの

悟りの境地で会得したものがあるとして、このように述懐する、―「私のテニスの戦法はフォアのクロスを徹底的に打つことと、ドライヴ・ロブを上げて、常に前へでること」。

そして、西八条のテニス人生の後半は、島津製作所に入社した昭和二十二年から始まる。戦後のすさんだ世相の中で実業団テニスへの気運はすでに芽生えはじめていたものの、硬式ボールの調達は厳しくまた、社会人テニス界にあって当時はまだ軟式テニスが隆盛を誇る時代にあって、企業における硬式テニスの普及と徹底に率先して身を挺し、島津製作所をテニス王国の一角までに成長させるに大きく貢献した。

それらが功を成し、平成三年五月から平成十七年三月までの間、京都テニス協会会長に就任し、（現在、名誉会長）、同時に平成七年五月より平成十三年六月まで関西テニス協会会長の任（同時に、日本テニス協会副会長を併任）に就いた。

（三）高谷耕二（京三中三十八回、昭和二十二年卒）

今年七十八を迎える高谷は今なお、紛れもなく現役選手である。つい最近も、平成十七年（二〇〇五年）十月、全日本ベテラン・テニス選手権ダブルス、七十五歳以上の部で優勝を果たした。

現在も週二回程度、ホームコートである「高井戸ダイヤモンドテニスクラブ」で汗を流している。本人の言によれば、すべて健康維持のためと謙遜気味に言うが、そのプレー振りを見れ

ばトーナメントを想定した練習であることは確かである。

そんなテニス三昧に明け暮れる現在に比べて、六十年前の高谷の三中時代は太平洋戦争の影響をまともに受けた、言わば受難の学生時代であった。昭和十九年七月から翌年八月の終戦までの一年有余、当時三年生であった高谷は学徒動員として、愛知県半田市の中島飛行機半田製作所での、艦上偵察機（彩雲）の組立工場での製造あるいは修理に関わる仕事に従事する。

当時、その半田製作所に動員された学生は、京三中に限らず地元の半田中学をはじめ、近県からも女子挺身隊、海外からも朝鮮の青年などあらゆる職域の若者が動員され、実体は半強制労働でありながら産業戦士という美名の下に勤労させられていた時期であった。そして終戦と同時に京三中たちは再び学窓に戻り、失われた青春の一時たりとも取り戻すべく勉学に、運動に精力を向け始めた。

高谷、井上喬、辰馬智夫並びに松居豊等五、六人の同級生仲間は、当時の軟式全盛時代

前列中央：高谷耕二（三中 38 回卒業）

にあって、戦時中は敵性スポーツとみなされた硬式庭球部の立ち上げに、一旗揚げるべく奔走した。当時、井上の言葉にしたがえば「コートがない。ボールがない。ラケットもない。靴もない。」文字通り、ないないだらけの時代であった。そんな時期にあって、テニス一家であった高谷家からの用品、用具の提供は「神からの授け物」に近いプレゼントであったろうと思われる。

コートの方はといえば、その節は・府二・こと、府立第二高等女学校のコートを借用して、練習に励んだという。高谷はこうした苦難の時期を乗り越え、昭和二十三年（一九四八年）、慶応義塾へ進んだ。テニスはそれ以降というのも、中原、西八条にも共通する、怒濤のような練習づけの日々で明け暮れた。そして四年次、昭和二十七年度全日本学生ランキング、四位にランクアップされるに至った。

彼は大学卒業後、明治生命に入社したのち、ひきつづき社会人テニスで活躍の腕をみせる一方で、前記の高井戸ダイヤモンドテニスクラブの理事長として社会人テニスの普及に邁進した。そしてさらに平成元年（一九八八年）から平成六年（一九九三年）まで慶應義塾体育会庭球部総監督に就任し、大学テニスの発展と後進の指導に尽くし、その名を高からしめた。

現在は、後に述べる「山城庭球倶楽部」の会長として、ある

いは冒頭の戦績を横目にするでもなく「京三中卒、唯一の現役」として庭球部ＯＢの中での、その信望はすこぶる厚い。

（四）山本宗五郎（山城五回、昭和二十八年卒）

山本の、生涯にわたるテニス・テーマは端的に言えば「軟式からテニスへ」と「テニスを高校に」の二つに尽きる。

あえて言えば、それはあたかも彼のテニス・ライフの目標を前半と後半のテーマに分類したものに等しい。そして、両方ともにメッセージは現在、ほぼ達成されたとみて差し支えない。山本は昭和二十八年、山城高校を卒業後、迷うことなく東京教育大学（現・筑波大学）に進学する。彼の哲学からすれば、なんの矛盾も衒いもない当然のコースであった。性格が穏やかで、生来、子供好きで、しかも人に教え、人を育てるということに無類の喜びを感ずる本人には、早くから想定していたメニューでもあった。

東京教育大学は言うまでもなく学校教師のご本尊で

前列右より二人目：山本宗五郎

あり、そしてまたテニス好きの本人にはお誂え向きの学校であった。—即ち、明治十一年頃我が国で最初にテニスを体操科目として導入した、東京高等師範学校を先祖にもつ伝統校でもある。山本は合格発表の日、そのままテニスコートに直行し、入部手続きを取った。そして大好きなテニスが毎日、心おきなくできることに、人生で何度かしか味わえない「満足」に浸り、四年間を文字通り「テニス漬け」で送ったという。

大学卒業後は、故郷の浜松市に居を構え、静岡県内の公立高校に社会科の教員として勤務した。当時、県内では、テニスをクラブ活動として採用していたのは静岡県内では五校ほど、浜松市に至っては皆無という状態であった。早速、軟式テニス部の生徒たちを説得して回り、何とかテニス部創設に辿り着いた。それからというもの、毎日、コートに立ち、指導部員には厳しい練習を課す一方、県内の高校に軟式からの転換を呼び掛ける日々が続いた。

昭和四十二年（一九六七年）静岡県高体連テニス部長に就任。とりわけ浜松地方の高校五十校を回り、「軟式からテニスへ」の呼びかけが功を成し、その結果、テニス採用校は五十校を超えるに至り、全国でも東京、大阪に次ぐ成果をみたという。

昭和五十四年（一九七九年）、全国高体連副部長に就任。

「テニスを高校に」をスローガンに底辺拡大を目指して、長

年の努力を重ねた結果、平成十七年（二〇〇五年）現在、硬式テニスをクラブ活動に採用する高校は四千校に迫るまでの成果を見るにいたった。話は前後するが、山本は平成七年に三十七年間にわたる教師生活を終え、定年退職を迎えている。そして、それから十年、いまは地元、浜松市であらたに小中学生を対象とするジュニアの育成に向け、浜松市テニス協会を通して、プロモーションを展開する毎日である。

その成果は、ジュニア大会に参加する小中学生の数に如実に反映しており、十年前には四十名程度に過ぎなかった者が、二〇〇五年現在四九〇名の数を見るにいたっては、ほぼ目標達成の域にきているという。

Ⅷ　「京三中・山城高テニスＯＢ会」について

母校のテニスＯＢ会では毎年八月下旬、現役・ＯＢ親睦テニス大会を開催している。これは、双方あわせて年々増加の一方をたどる現象にたいし、より一層親睦の輪を保ち、その糸口を強くしていこうという趣旨からおこなわれている恒例行事である。

上は七十五歳の齢を過ぎる京三中の、文字通り Old Boys から、下は孫の年齢に相当する現役一年生のテニス部員まで、例年五十名を超える老・壮・若・男女現役・ＯＢが集い、言うなれば「山城高テニス・ファミリー」が年一回、テニスコートで相互の親善を図ることを目的としたイベントである。

行事の内容は、ダブルス・ゲーム（ミックス）を中心に現役・ＯＢがペアを組みあるいはペアリングを何度か変えて、和気藹々の雰囲気で進行していく。使用する三面のコートの内、後半の段階では二面を利用して、ＯＢの若手コーチたちが集中的なテニス・クリニックを施し、必要に応じて個別的な技術指導を行うなど内容の濃いプログラムとなっている。

ところで、この催しを主催する「京三中・山城高テニスＯＢ会」は、もともと昭和二十八年（一九三八年）頃から、貴志弘（山城四回、昭和二十七年卒）と甲斐圭三郎（山城五回、昭和二十八年卒・故人）の二人（当時それぞれ京大、甲南大庭球部）が現役たちを指導し（―とくに夏休みなどには連日―）、コートに馳せ参じ始めたことから話は進んで、昭和三十六年、テニスＯＢ会結成に実を結んだという経緯をもつ。

代表幹事には、甲斐圭三郎が勤め、当番幹事には卒業後二年

ＯＢ現役交流会

目のＯＢが案内状発行などの事務を担当することも決められた。

そして後年、甲斐が東京に転勤となって以降、平成元年から平成十七年の現在にいたるまで中村長平（山城八回、昭和三十一年卒）が代表幹事を引き継いだ。一方、使用コートもその間に現役・ＯＢともその数が増えていたことから、松原義雄（山城八回、昭和三十一年卒）の世話により、自らが勤務する村田機械製作所のコート三面を斡旋して今日の隆盛をみることができ、今日に至っている。

Ⅸ　山城テニス倶楽部について

この倶楽部は高谷耕二（前記）を会長に、関東近辺の在住者約十名前後のＯＢ並びに関連のテニス愛好者たちで構成されている。

その成立の経緯はこうである。

平成二年（一九九〇年）ごろ、東京、横浜地域に住む母校の庭球部ＯＢ―京三中三十八回から山城十一回―で現役当時に練習を共にした仲間で、今も続けている人が少なからずいることが関係者の間に伝わり、爾後、自然発生的にラケットを通じて会合をもつに至った。

そこへ、その大半の人たちが定年を迎えて、暇のいっときを

各種のベテランテニス・トーナメントなどの参加に仕向けたところ、当該の元「庭球部」が意外や二、三名ならず見かけたことも輪をかけた。

このような経緯で、当初は会員の所属する企業のコートやテニスクラブを利用して旧交を温めていた。ところが、その頻度が多くなって来るに伴い、単に「旧交を温める」レベルから、現在の齢（よわい）を顧みつつ一歩進んで、「青春のロマンを維持する」意識にまで高まり、挙句は本格的な練習を目論んでか、平成四年（一九九二年）、横浜市テニス協会に正式に加盟するまでに至った。

「体育会」系テニスをこのように再開して早十数年、現会員の最低年齢でさえ、もう六十五歳を過ぎる。昨今気付いたことなのだが、この倶楽部の会員は相変わらず山城四、五回卒から十一回卒までの範囲で終始し、まるで昔申し合わせて横浜に移住してきたかの感を呈していることである。要するに、後続がないのである。

まあ、それはそれ、今、成すべき事は折々をとらえて山中湖や、湯河原あるいは伊豆高原のリゾートテニスクラブを訪ねて、酒と談話、若作りのテニスと景色の雰囲気を味わい―「これからの人生」に話の花を咲かせながらも―いま、生きていることを有りのままに満喫すること。これだ、と我々一同は信じている。